

文化庁月報



1985-11

No.206

【表紙】

重要文化財
木造阿弥陀如来立像
解説は30ページ

題デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：文化財保護法制定35年

文化財保護と歩んで35年(1)

関野 克 4

産声時代の文化財保護(1)

森田 孝 8

法隆寺昭和大修理の貢献

浅野 清 10

・町並紹介シリーズ ⑦歴史を活かす町づくり 12

⑧内子・塩飽本島町笠島 14

報告

- ・特色ある地域文化の振興に向けて
—昭和60年度文化振興会議報告— 16
- ・著作権審議会第7小委員会
(データベース及びニューメディア関係)
報告書について 18
- ・ストックホルム・東アジア博物館に
おける「日本陶磁名品展」 20

文化庁ニュース

- ・昭和60年度文化勲章受章者、文化功労者
決定 22
- ・昭和60年秋の褒章受章者決まる 23
- ・昭和60年秋の勲章受章者決まる 24
- ・昭和60年度地域文化功労者表彰式行わる 24

- ・地域文化活動紹介シリーズ②⑨ 広島県・呉市 27
- ・文化庁行事報告及び予定 30
- ・国立劇場ニュース 31

法隆寺昭和大修理の貢献



はじめに

―修理技術改革の好機―

昭和九年に十年計画で始まった法隆寺の大修理が、困難な時局をくりぬけて、最初の計画が修了したのが昭和三十年であった。しかしその後の新指定も二十件近くになったので、その修理が奈良県によって完成されるまで、更に三十年かかり、通計半世紀を経過したのであるが、私はその最初の十五年間の工事に携わった者として、この工事の保存事業や学界へ及ぼした貢献について述べておきたいと思う。

文化財保存の法律が最初実施された明治三十年代には建築家養成機関は東大しかなく、その卒業生は年数名に限られていたので、修理現場を担当したのはすべて優秀な大工さんであった。当然長所もあったが、江戸末以来の修練の殻を破ることは至難でもっと古い技法を虚心に研究することは望めなかった。その点の改革を目差して苦勞されたのが、国宝保存法成立の頃から、法隆寺大修理の初期にかけて、宗教局保存課の技術面の最高責任者であった阪谷良之進博士で、そのころは法隆寺国宝保存工事事務所創設の人事によく現われていた。トップには服部勝吉さんという精鋭が据えられたが、集められた工事

主任級の技術者は五十代、六十代の老練の人達で、その下につけられたのが私達学校出の白紙の青年技術者であり、そこには綱渡りのような危機感がこもっていた。従って服部技師の張り切り方は並大抵ではなく、夏などは朝七時から夕六時までの仕事が続いてからのお居残り、月二回の休日には見学に出かけるといふ、はげしい日々が続いた。

ところが時局が急転して、一年経つと予算の大削減から機構も半減され、服部技師も老練主任の三名中二名が転出になって、駆け出しの私も大講堂という大工事の主任を命ぜられるという現実が到来した。それから阪谷技師が本省から出張される機会に、直々細かい技術面まで指導されるという緊迫した状況であった。正に産みの悩みであった。

建築遺跡発掘への基礎造り

話は前へ戻るが、発足初年に東院礼堂の地下で掘立柱の柱根が発見されるといふ、大問題がおこった。昭和二十年代末ともなると、平城宮跡はじめ、各所で発掘されるようになって、掘立柱の出現などは日常茶飯事となったが、当時としては大ニュースであった。工事事務所では見事に対応できたが、翌年か

らの大講堂の工事で、地下発掘の問題が発生した。というのは、前の講堂が延長三年（九二五）に焼けた後、再建するに当たり、その位置を後退させて、北室の跡に建てたと伝えられていたからである。実はこの北室の調査を唆したのは意外に思う人もあろうが、法隆寺管長佐伯定胤殿下であった。管長はそうしたことに積極的であった。そこでまず上部へ突出していた仏壇（土壇）を掘ってみると、その中から長さ二間（現仏壇は三間）の低い旧仏壇が出土した。ところが凝灰岩の礎石を掘りおこしてみると、古い礎石を裏返しに再使用したもので、下面に立派な方形柱座が造り出され、そこには円柱の載った痕まで残っていた。それで、新発見の仏壇を中心に、この礎石を本来の姿で使った堂がここにあったに相違ないと判断され、その礎石を据えるために掘った穴を探そうと、土の区別をしながら掘って行くと、意外にもこの礎石をやはり裏返しのまま使った、もう一つの同じような方形柱座の雌型を発見することとなった。結局、前の堂は位置も大きさも再建堂に一致し、身舎（内陣）が現堂よりも広かったことが分かった（花崗岩の礎石も同様位置が移されていた）。となると未だここに第三の堂跡があるかも知れないと疑われたので、もう一度掘穴を探してみると、今度は足場柱の掘穴が整然と現われた。なお、そのうちの一つから古銭「隆平永宝」が出土して、旧堂は平安時代に入ってから建立されたことが分かった。結局北室ではなく、正に旧講堂で、伽藍配置の旧説の訂正となった。

次に東院舍利殿・絵殿と伝法堂の工事では、先に発掘された東院礼堂の掘立柱に引き続いて東西回廊

と、遂にそのうちの二つから掘立柱の穴の一隅が見つかった。こうして斑鳩宮跡の発掘が実現することになったが、この発掘に歓喜されたのも佐伯管長であった。発掘の話が長くなったが、戦後奈良国立文化財研究所で、平城宮跡や飛鳥寺等の発掘で成果があがったのは、こうした発掘経験を持つ建築史家が考古学者に協力する体制を樹立したからで、そのルーツを示すためであった。

文化財建造物調査に画期的革新

―原形復元方法の確立―

元へ戻って、建築本来の分野での新しい開発は建築物の原形復元方法の確立であった。およそその建物でも後世の改造を受けていないものは稀であるが、古代の建物ともなると、改造が繰り返されていて、復元の資料となる旧材の廃物利用されているものや、柱等に残る仕事の痕跡なども重複していて、組み合わせが複雑になるため、その復元は至難となる。結局それを解決するには、あらゆる資料を細大漏らさず出し尽くし、その前後関係を考察しつづ、創建以来の変遷を洗い尽くさないと成功しないことが分かっていた。その上、古代の仕事は類例の多い中近世のものとも違い、常識を外れた方式が取られていることも多く、それら不可解な資料は理を求めて、納得いくまで丹念に考察する必要がある、調査は何層倍の手間と忍耐が必要になってくる。

そうした努力を一つの建物について、数年にわたって持続した結果、東院伝法堂などでは、奈良時代の原形が再現できたのみでなく、その前身であった、この堂の寄進者橘夫人の邸宅と見られる古代の官殿建築が具体的に再現でき（模型で実施）、建築史上の

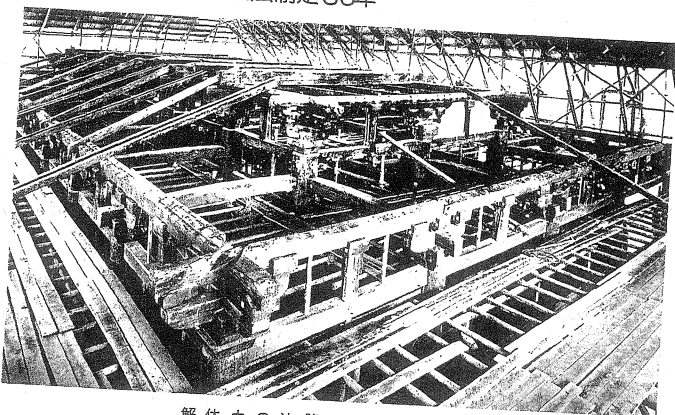
大きい収穫となった。このように成果が克明に出たことには当事者自身も驚嘆したことであったが、こうして調べれば分かるという自信が、それまで改造が甚だしくて、文化財にも指定されていなかった法隆寺の東堂・妻室・網封蔵などを指定に踏み切らせ、後日解体調査の結果、果たして原形が判明し、東室と網封蔵は国宝に格上げされ、妻室も他に類例のないものと分かり、一級品となったのである。そうした成果は法隆寺のみのものではなく、やがて文化財建造物修理全般に波及して、調査の画期的な革新につながって行ったのであった。

もう一つ付け加えるならば、修理工事報告書を出版する先鞭をつけ、しかも精密に調査の結果を書き残すことを始めたのも法隆寺の修理で、やがてそれが工事に義務づけられるようになったのであるが、それらの保存事業への貢献はもとより、建築史、ひいては文化史上への裨益も大きかったのである。

保存科学の草分け

最後に申し添えたいのは金堂壁画保存の事業である。これは折角の努力が壁画そのものの焼損によって、全く色褪せてしまい、口惜しい限りであるが、昭和十年代には一流の科学者を集めて、保存対策が討議され、アクリル樹脂による剥落止めなどが実施されたが、これが今日の保存科学の発展の原点であったことを指摘しておきたいのである。

浅野 清（あさののきよ） 明治38年名古屋市長生まれ、大正14年名古屋高等工業学校卒業、昭和9年124年まで法隆寺国宝保存工事事務所勤務、昭和27年工学博士となる。大阪市立大学、愛知工業大学教授等歴任。



解体中の法隆寺大講堂（昭和11年）

国立劇場 ニューズ

十二月歌舞伎公演(大劇場)

並木宗輔 作

一谷嫩軍記

一幕二場

長谷川伸 作

村上元三 演出

一本刀土俵入

二幕五場

12月2日(月) 26日(木)

十二月歌舞伎公演は、「一谷嫩軍記」と「一本刀土俵入」の二本を採りあげます。

古典歌舞伎の時代物の代表作である「一谷」を花形俳優中心の撥刺とした演技で、新歌舞伎の世話物の傑作である「一本刀」をベテラン俳優の円熟した滋味溢れる芸で、それぞれ存分に楽しんでいただける今回の公演は、年末にふさわしい賑やかな舞台となるにちがいありません。

「一谷嫩軍記」は全五段の義太夫狂言で、その内三段目後半の「熊谷陣屋」が最もよく上演されますが、今回は二段目前半の「陣門・組討」と一般に呼ばれている場面を選んで採りあげます。雄大な紺碧の海を背景に描かれる、源平の戦いの秘話ともいふべき物語で、重厚で情感溢れる美しい舞台や子役を使つての「遠見」の趣向など目でも耳でも楽しめる歌舞伎の醍醐味を満喫していただけるでしょう。また、幸四郎・勘九郎・藤十郎というトリオによる清新な配役も、戦国の若武者の悲哀を更

に際立たせてくれるものと期待されます。(あらすじ)

熊谷直実の一子小次郎は初陣に手傷を負い父に救われます。また、直実は平家の若武者を組伏せしますが、それを平敦盛と知り救おうとします。しかし、平山季重に見咎められ止むを得ず首を打ちます。平山に横恋慕され負傷した敦盛の許婚・玉織姫も、敦盛の死を知って息絶えてしまい、直実は世の無常を感じつつ「勝どき」の声を挙げるのでした。



勘三郎の茂兵衛

「一本刀土俵入」は長谷川伸の名作として、歌舞伎以外の演劇・映画等でもお馴染みの作品です。勘三郎の名人芸、茂兵衛と今回初のコンビを組む梅幸のお話との顔合わせは、芝居好きには見逃せません。切々たる叙情と哀感には背景に男の意地と夢を描ききつたこの作品の魅力を、十分に味わっていただきたいと思ひます。

(あらすじ)
取的の胸形茂兵衛は、取手の宿の酌婦お萬と出会って恩義を受け、立派な横綱となることを誓います。十年後、

茂兵衛は博徒として有名になり取手を再訪しました。お萬は彫師の辰三郎と娘との生活を送っていますが、辰三郎は波一里儀十一味に追われていました。茂兵衛は一味からお萬親子三人を逃がしてやり、その後姿に向け「これが恩返しのお返しだ」と深々と頭を下げるのでした。

●その他の公演(12月)
■舞踊・邦楽公演(小劇場)
明日をにう新進の
舞踊・邦楽鑑賞会
6日・6時

■文楽公演(小劇場)
二人禿・一谷嫩軍記
10日・22日・5時(土・日のみ)
12時・5時

■文楽鑑賞教室(小劇場)
解説 壺坂電歌記
10日・20日・11時・2時(14日・15日を除く)
演芸(演芸場)
上 席1日・10日・1時(土曜のみ)
中 席11日・20日・1時(時・5時半)
花形若手演芸会
21日・1時
22日・1時

■能・楽(千駄ヶ谷・能楽堂)
定例公演
御塗附・絵馬
4日・1時
御福の神・満仲
20日・6時半
普及公演
御婢・草子洗小町
14日・1時半
特別公演
野宮・御茫々頭・春日龍神22日・1時

詳細につきましては左記へお問合せ下さい。
○三・一六五・七四一(大劇場・小劇場・演芸場公演)
○三・一四三・一三三(能楽堂公演)
○六・二二二・二五三(文楽劇場公演)

編集後記

○去る11月4日、法隆寺・国宝・重文の昭和修理が完成し、慶讃法要が行われました。
○折しも、文化財保護法がその制定以来、今年で35年を迎えました。その間の先人の苦勞は、関野、森田、浅野三先生の論文からしのばれます。
○関野先生ご指摘のとおり、「文化財」を法律用語に留めず、その保護の心の豊かな発展をめざして、これからも文化財保護行政を進めていきたいと思ひます。単に、文化財の保護に留まるのではなく、それらをいかに活用していくかが、今後の課題といえるでしょう。

○次号も引き続き、文化財保護法について特集をくんでおります。ご期待ください。(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)3268-1241(代表)

「文化庁月報」十一月号

(通巻第106号)
昭和60年11月25日印刷・発行
編集 文化庁
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 東京都新宿区西町52番地
電話(03)3268-1241(代表)
振替口座 東京 九一六-1番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)